国土学事始め

大石久和
早稲田大学大学院
客員教授

「新しいことを尊ぶ」文化力

わが国では、数多い神社が式年遷宮の伝統を持っています。もっとも有名で、もっとも大がかりなのが、伊勢神宮の式年遷宮です。なぜ、まだ十分に使用に耐える社殿を一新するのかについては、技術の伝承のためであるとか諸説があるようですが、「神道の精神として、常に新たに清浄であること（「常若（とこわか）」）を求めたため」というのがもっとも説得力があるように思えます。

建物がいまだ使用可能の状態であっても、老朽化することは汚れることであり、神の生命力を衰えさせることとして忌み嫌われたため、建物を新しくすることにより神の生命力を蘇らせ、活性化することになると考えられたのではないか、というのです。

しかし、たとえばパリの街もその面影を残したまま大切にしていますし、最近ベルリンが再開発されましたが、幹線街路沿いでは昔の街路景観を維持しようとしました。このようにヨーロッパでは、古くなることは汚れることなのではなく、むしろ尊いことなのです。

これを、「彼らは昔からの景観を大切にするのに、われわれは景観を粗末にする」と非難する人がいますが、その非難はまったく間違っています。自然災害のない彼らは古いものを大切にできるのですが、われわれは新しくなることを喜ばざるを得ないのです。

伊勢神宮などで式年遷宮が行われるのは、とにかく「新しくなる」ことそのものが価値と考えたからと思います。それはなぜかといえば、地震・噴火・風水害などの自然災害を絶え間なく受け続けてきたわれわれは、街路景観など維持したいと思っても、火災や自然の猛威によって簡単に破壊されてしまうからです。これらの経験を通じて、阪神淡路大震災の後がそうでしたが、今回の東日本大震災からも「新しいことを尊ぶ」文化力を発揮して、必ず力強く再び立ち上がることができると信じています。